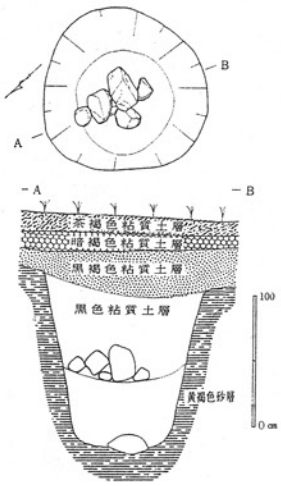
石川・白山（しらやま）橋遺跡

1 所在地　石川県鳳至郡穴水町字大町小字龍山寺・下出
2 調査期間　一九七九年（昭54）一〇月～八〇年（昭55）三月
3 発掘機関　穴水町教育委員会・穴水町埋蔵文化財調査委員会
4 調査担当者　四柳嘉章・辻本　馨
5 遺跡の種類　集落跡・墓跡
6 遺跡の年代　弥生・古墳・平安・鎌倉・室町時代
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

白山橋遺跡は、能登半島の屈折点にあたる穴水盆地の奥部に位置し、小又川の左岸に立地している。標高約二・七m。白山橋を中心として周辺一帯に遺物の散布が認められるので、通称名をとらず白山橋遺跡と呼ばれてきた。



白山橋遺跡　1号土壙

一九七六年（昭51）に新小又川改修工事に係る調査が実施され（A地区）、一三～一四世紀に属する二棟の掘立柱建造物が検出されている。その後、穴水都市計画西川島地区区画整理事業に係る調査（B地区）によって、中世の配石遺構群と五棟の掘立柱建物、溝状遺構、土壙が検出された。配石遺構の内部には多数の漆器椀やスリコギ棒等が納められていた。

木簡が検出された2号土壙は、長径一mの楕円形を呈し深さは一・四m。壙底から中程にかけて、青磁・土師質土器・箸状木器等の含まれた黒褐色砂質土層が詰っており、その上層に石・多量の箸状木器・土師質土器・珠洲焼が散布していた。注目されるのは、ほぼ中央にあたかも神の依代の如く、一本の立木が存在したことである。周囲にはその散った葉が、まだかなり残っており、北隅には木簡（呪文札？）が頭部を下にして、さかさまの状態で刺っていた。さかさまの出土状態が気になるが、何か「呪詛返し」のような使用法があったのだろうか。類例の増加がまたれる。一四世紀中葉。

8 木簡の釈文・内容

「□□□」　260×38×6　051

墨書痕はあるが判読できない。形態（圭頭で先端が尖る）と出土状況から呪文札と推定している。

9 関係文献

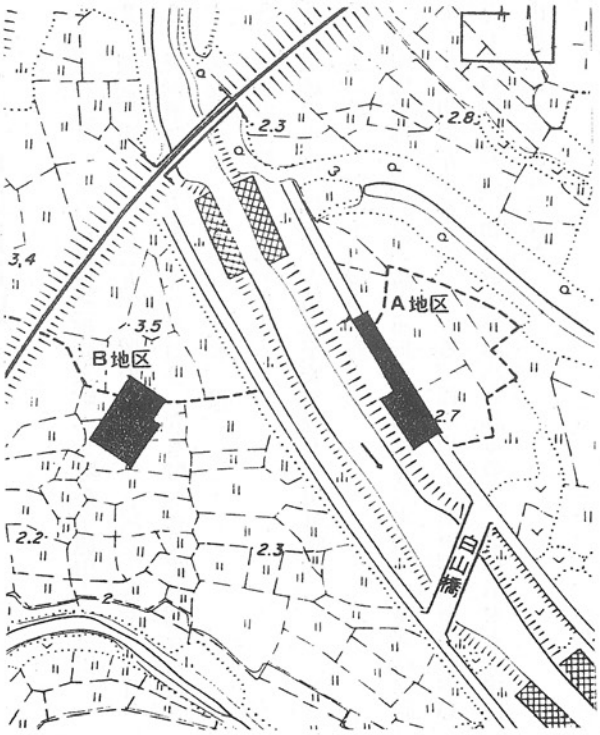
四柳嘉章・高　一男『穴水町白山橋遺跡調査報告』　石川県教育委員会　一九七七年
四柳嘉章・辻本　馨『西川島・I』穴水町教育委員会

一九八〇年

四柳嘉章「能登・穴水盆地における中世遺跡群の調査」（『信濃』第三三巻第四号）

一九八一年

（四柳嘉章）



白山橋遺跡の立地

木簡研究 創刊号

岸 俊男

創刊の辞

一九七八年出土の木簡

概要 平城宮跡 藤原宮跡 紀寺跡 長岡宮・京跡 平安京西市跡 平安京左京八条三坊跡 吉田南遺跡 下郡遺跡 小判田遺跡 城山遺跡 伊場遺跡 二之宮遺跡 御子ヶ谷遺跡 平形遺跡 城輪柵遺跡 堂の前遺跡 秋田城跡 草戸千軒町遺跡 尾道市街地遺跡 長門国府周辺遺跡 三宅廃寺

一九七七年以前出土の木簡(一)

柚井遺跡 払田柵跡 平城宮跡（第五次・第七次） 正倉院伝世の木簡

中国簡牘研究の現状 大庭 脩

東北地方出土の木簡について 平川 南

長岡京木簡と太政官厨家 今泉 隆雄

藤原宮跡出土の官奴婢関係木簡について 鬼頭 清明

記念講演（M・ローウェ）要旨

木簡第一号発見のころ（田中琢） 彙報

頒価 三〇〇〇円 〒四〇〇円